

第1章 「奇妙な仕事」「死者の奢り^{おご}」「他人の足」

「おかしな二人組」が大江を読み直す

小森 これから大江健三郎を読み直すにあたって、のっけから変なことを言わせてください。

成田龍一さんは歴史学者でありながら、文学の読みに関しては私などよりも遙^{はる}かに巧者な方なのです。

成田 いきなり、なにをおっしゃいますか（笑）。

小森 私は東京都立竹早^{たけはや}高校の出身ですけれども、成田さんは麻布^{あざぶ}高校を出ていらして、その時点で学力と能力の差をつけられています。その後、私は北海道大学に入学するのですが、教養課程から学部に移るときには、成田さんと同じく歴史学の専攻に進むことを志望していました。ただ、そもそも私は幼少期の経験からロシア語しかできません。だから第一志望は史学科の西洋史、次に日本史、それから東洋史。当時は第七志望まで記入できたので、続いて文学科

のロシア文学、英文学……と書き、国文科は最後の空欄を仕方なく埋めたものでした。あの頃、私はビラとタテカンとアジテーションに明け暮れていたもので、成績がかなり悪い。結果的に第七志望の国文科にしか進めず、その人生を全うしなければならぬ運命となったのに対し、成田さんは最初からみずから志望した道をずっと歩まれていらっしやいます。

成田 いやいや、これが「文学的な語り」ですね（笑）。私は「歴史的な語り」の人間ですから、語り手としての「私」については、ほとんど語ったことがあります。一九七〇年代のはじめは、文学研究と歴史学研究は近接しながら、距離もありました。専攻を決めるあの地点が分かれ目となり、異なった専攻に入り込みましたが、小森さんとはその後——一九九〇年代なか頃と記憶していますが——に出会い、現在に至っています。

さて、これから私たちは、あらためて文学と歴史の視点から大江の作品を読み解いていきたいと思います。大江が活躍した一九五〇年代からの「戦後」の時代は、すでに歴史学と文学研究は異なる領域であって、それぞれ全く別のものだということが言われていました。互いに異なった領域として、歴史学の領域ではそんなことをやっていたら文学になってしまふよ、という批判がされていましたし、文学研究でも、その解釈だとまるで歴史家じゃないかなんて^{けな}貶し言葉が横行していましたね。

小森 そうそう。歴史学と文学研究は、この時期互いに対立していたわけです。

成田 言うまでもないことですが、それぞれが扱う対象や現象は重なり合っています。なのに、私たちは専門的な訓練として、いつの間にか、文学研究か歴史学かを区別するメガネを持たされてしまった。そのせいで解釈の幅が狭くなり、描き出す文学像も歴史像も貧弱になってしまっていました。しかし、さつき国文学の道に嫌々進むことになったという物語を話されましたが、私からすると、小森さんは、歴史と文学研究、さらに文学との対立構造をつなぎ直した立役者なんですよ。

小森 だって本当に嫌だったんですから。第七志望ですよ！ 嫌々以外の何物でもない。大学院に進学したのだって、高校の教師になるためでしたし。私はずっと活動家で、何度も北海道警察のお世話になっていたので、教職を得るには、大学院で一級免許を取って、高校の国語教師にでもなる以外の方法がなかったわけです。

成田 また文学的語りがはじまりました（笑）。こうやって私たちは、学生時代に文学と歴史を切り分けることを叩き込まれたわけです。「戦後文学」と「戦後歴史学」を区別して、歴史学は科学であり、対して文学はフィクションだと考えるのが私たちの習った時期の歴史と文学の見方だったのですね。

小森 歴史学は客観性の科学、文学は主観性の世界みたいに言われてましたね。

成田 ええ。でも、当然のことですが、当時の大江健三郎をはじめとする「戦後」の知識人た

ちは、歴史と文学、政治と文化のすべてを合わせて考察の対象としていました。歴史学と文学・文学研究の切斷を反省させる存在の一人として大江健三郎がおり、これから二人で、そうした作家がなにを考えていたのかをじっくりと読み、考えていこうと思いついたわけです。

大江を取り上げるのは、大江が「戦後社会」の全体に目配りし、長きにわたって発言を続けたこととともに、いま一つ、二〇二〇年代の危機があるからです。世界史は冷酷に、目の前で新しい危機を発生させています。二〇二二年二月のロシアによるウクライナ侵攻、それが収束しないなかでのイスラエルとパレスチナの衝突。そうした現在、世界のなかで起きている危機をどう捉えればよいのか。一九七三年の時点で、すでに「新しい戦前」という言葉を用いて核時代の危機を指摘し、時代と向き合ってきた大江健三郎の営みを手がかりに答えを探っているというのが、この対談の趣旨です。

私と小森さんは、長い付き合いです。そのなかで、小森さんからたくさんのことを学んできました。今回は大江作品を読みながら、二人でもう一度、文学研究と歴史学の相互の関係性、位相についても考えてみたいと思います。さらに大江を読むには、文学の目線とその知識にとどまらず、広く社会を見わたし、歴史の知も動員するなど幅広い営みが必要です。小森さんとタッグを組むに至った大きな理由です。大江は作中によく「おかしな二人組」を登場させていますが、それを真似た実践ということになります。

小森 成田さん、うまいですね。大江文学のなかに出入りする「おかしな二人組」の対談というわけですね。そもそも私と成田さんを結びつけたものはなんだったかを考えてみると、栗坪^{くりつぼ}良樹^{よしき}さんという評論家がいだにいらっしやいますね。成田さんの高校時代の先生です。

成田 はい。私にとって、とても大きな存在です。栗坪さんは大江との関わりも深く、『厳粛な綱渡り』をはじめとする大江の初期エッセイ三部作の文庫版（講談社文芸文庫）の編集・解説を担当され、同じく編者として小学館から出ているシリーズ『群像日本の作家 23 大江健三郎』（一九九二年）の編集に関われました。大江からの信頼も厚い方でした。あと、私の印象に残っているのは、高校二年生の期末テストに大江健三郎のエッセイを使われたことです。大江のエッセイはとても難しいんですが、栗坪さんは高校生だった私たちに挑戦させたんですね。私は栗坪さんの影響で、大江を熱心に読むようになりました。

小森 さっきの文学的な語りの続きですが、教師になるために大学院に進んだ私は、二葉亭四迷のロシア文学の翻訳について研究をすることにしました。指導教師は亀井秀雄さんだったのですが、自分はロシア語がわからないから指導できないというので半ば放棄されたんですね。で、代わりにロシア語ができる杉山康彦さんと呼んだ。彼は『源氏物語』の研究者だったので、ロシア語ができたのです。二葉亭四迷によるイワン・ゴンチャロフの翻訳について学術的な論文を書いていらっしやった。だから、学部生向けの集中講義が終わったあとの杉山先生

を私は独占して、酒を飲みながらずっと二葉亭四迷のロシア文学について質問攻めにしていました。

栗坪さんは北海道大学の隣の藤女子短期大学に集中講義によく呼ばれていたのです。そこにいた日高昭二さんと栗坪さんは『評言と構想』という雑誌の同人だったからです。だから、私は栗坪さんが呼ばれてくるたびに、彼を捕まえてその都度、飲んでいました。

成田 かくして、私は歴史学の方へ、小森さんは文学の方へと、研究の道を歩むことになりました。そんな「おかしな二人組」が、これから大江作品を読んでききます。主として扱うのは、岩波文庫の『大江健三郎自選短篇』。大江が晩年の二〇一四年に至って、みずからいまの読者に読んでほしい作品——と言っても短編小説のみですが——を選んだアンソロジーです。それと同時に、長編小説やエッセイなど、大江を考えるのに欠かせない作品も読みます。こうした作法で、大江ワールドに入っていきたいと思います。大江健三郎がいかに読まれてきたか、どのように読んでいくかを考えるきっかけになればと思います。

この『大江健三郎自選短篇』を扱うにあたって、一つ留意しなければならないことがあります。それは、大江がこの本を編むにあたって、過去の作品にみずから手を入れているということです。書き直す、あるいは書き換える、というのは大江の一つの方法なのですが、それがこの『大江健三郎自選短篇』でも実践されています。どこをどう書き換えたのか、その都度指摘

しながら、小森さんと一緒にこの本を読んできたいと思います。